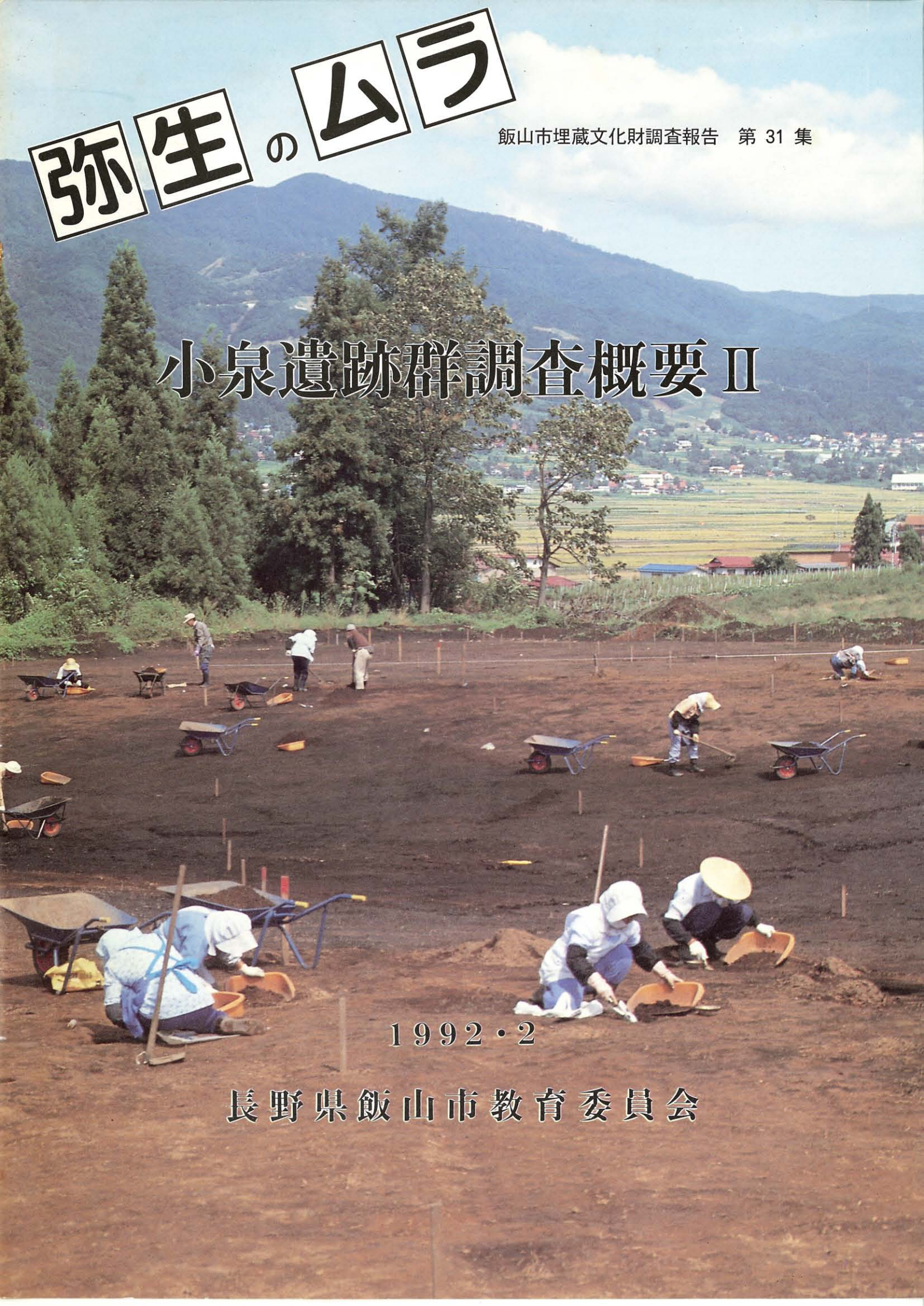
弥生のムラ

飯山市埋蔵文化財調査報告　第 31 集

小泉遺跡群調査概要 II



1992・2

長野県飯山市教育委員会

小泉遺跡群正誤表

ページ	誤	正
4	宮坂栄弐	宮坂英弐
6	V	VI　（VIの箇所削除）
7	土坑農（木棺墓）群	土坑墓（木棺墓）群
8	表中　時代（面積）	時代
10	III遺跡遺構分布図	II遺跡遺構分布図
17	D　小泉遺跡群遺跡	D　小泉遺跡群IV遺跡
22	E　小泉遺跡群遺跡	E　小泉遺跡群V遺跡
23	F　小泉遺跡群遺跡	F　小泉遺跡群VI遺跡
28	桜井伊都子	桃井伊都子

弥生のムラ

飯山市埋蔵文化財調査報告　第 31 集

小泉遺跡群調査概要 II

1992・2

長野県飯山市教育委員会

例　　言

1　本書は長野県飯山市が計画した長峰工業団地造成に伴う小泉遺跡群の平成２年度の発掘調査概要である。

2　同調査は昭和63年度に開始されており、当該年度分は『小泉遺跡群調査概要－長峰工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査－』飯山市埋蔵文化財調査報告第20集として報告しているため、『小泉遺跡群調査概要Ⅱ』として発刊するものである。

3　平成２年度における発掘調査は、同年５月29日より10月26日まで実施した。

4　調査にかかる組織は裏表紙に掲げた。

5　本書は概報であり、正式な調査報告書は平成５年度に発刊する予定である。

6　本書の作成は、調査員小林新治が主体となって行い、調査員全員が補佐した。遺物写真は田村による。また、執筆は小泉遺跡発掘調査団が行った。文責は望月にある。

7　本書中に使用した略号は以下のとおりである。

ＳＩ竪穴住居址　　ＳＢ掘立柱建物址　　ＳＥ井戸　　ＳＫ土坑　　ＳＫＢ土壙墓（木棺墓）

本書の内容

小泉遺跡群は、約二千年前の弥生時代中期から後期にかけての集落址である。長峰工業団地造成にともなって昭和63年、平成２年と調査が行われてきた。その調査面積は約二万五千平米以上に及ぶ。

遺跡群は６か所の丘陵に別れて存在しているが、その全てから中期及び後期の竪穴式住居や掘立柱建物址が発見されている。また、遺跡からは90基にも及ぶ土壙墓（木棺墓）が検出され、５基からは管玉や曲玉が発見された。弥生時代中期の木棺墓群としては東日本最大規模といわれている。本書はその平成２年度調査概要報告書である。

調査に携わった方々（平成２年10月）

1　概要

A　はじめに

飯山市は工場誘致対策の一環として、長峰工場団地の造成を企画し、市土地開発公社が施行する計画を立てた。それによれば、造成面積80,000㎡で平成２年５月を完成予定としていた。

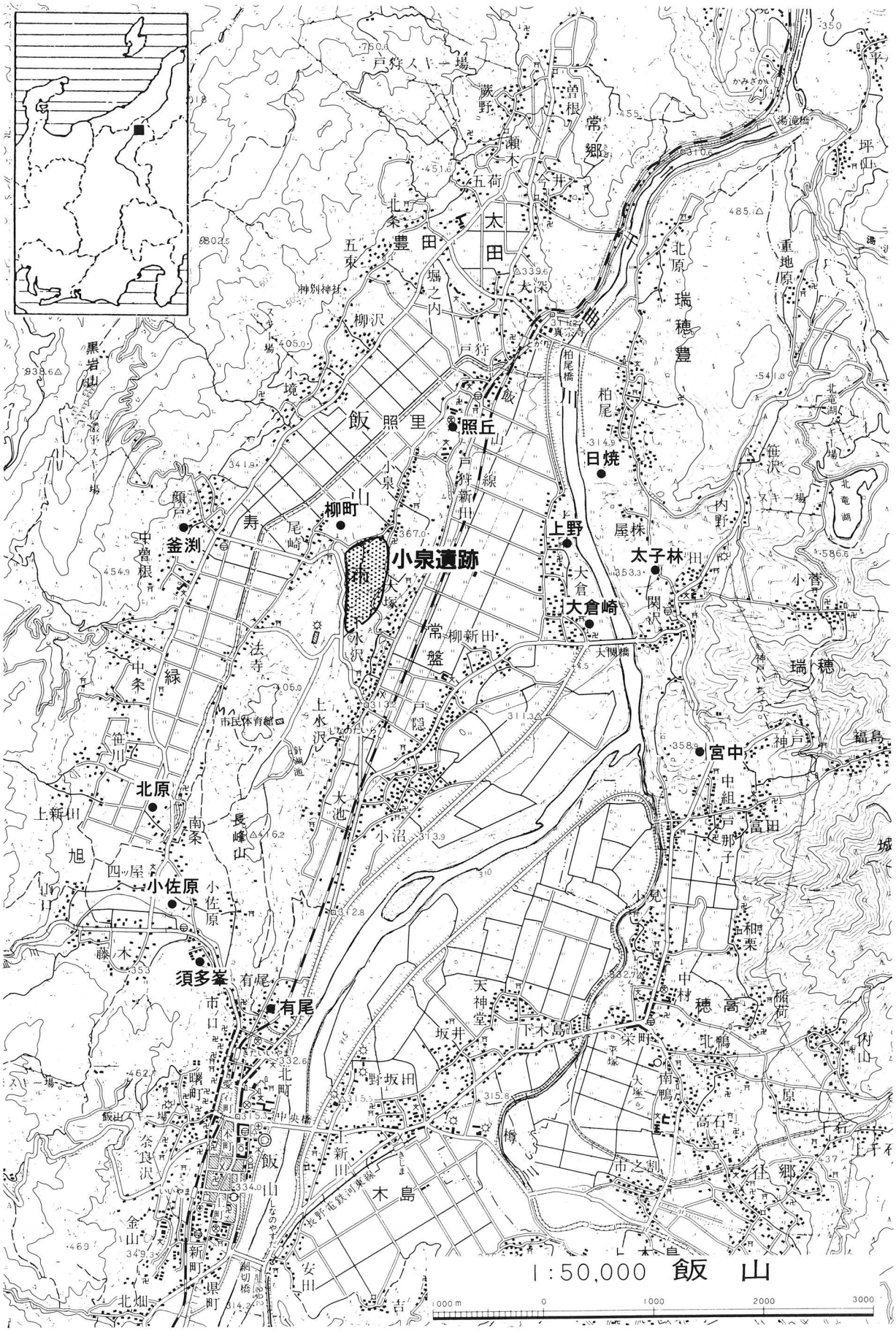
この計画地は、小泉遺跡群として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されていたが、工場団地造成構想そのものは昭和40年代から計画されており、その時点において遺跡の存在は必ずしも明確であったとは言えなかった。したがって当該地域の造成を行わないと新規計画に移れないという行政側の理由もあり、依頼を受けた市教育委員会は膨大な面積であったが、緊急の発掘調査を受託することにした。

このための調査は、昭和63年７月13日から行われた。そのうちの一部は土地未買収・代替用地の問題もあって翌年に調査を実施する計画として、同年11月25日に終了した（飯山市教委　1989）。平成元年、未調査地区の調査を予定したが前記交渉が難航したため調査を実施することができなかった。

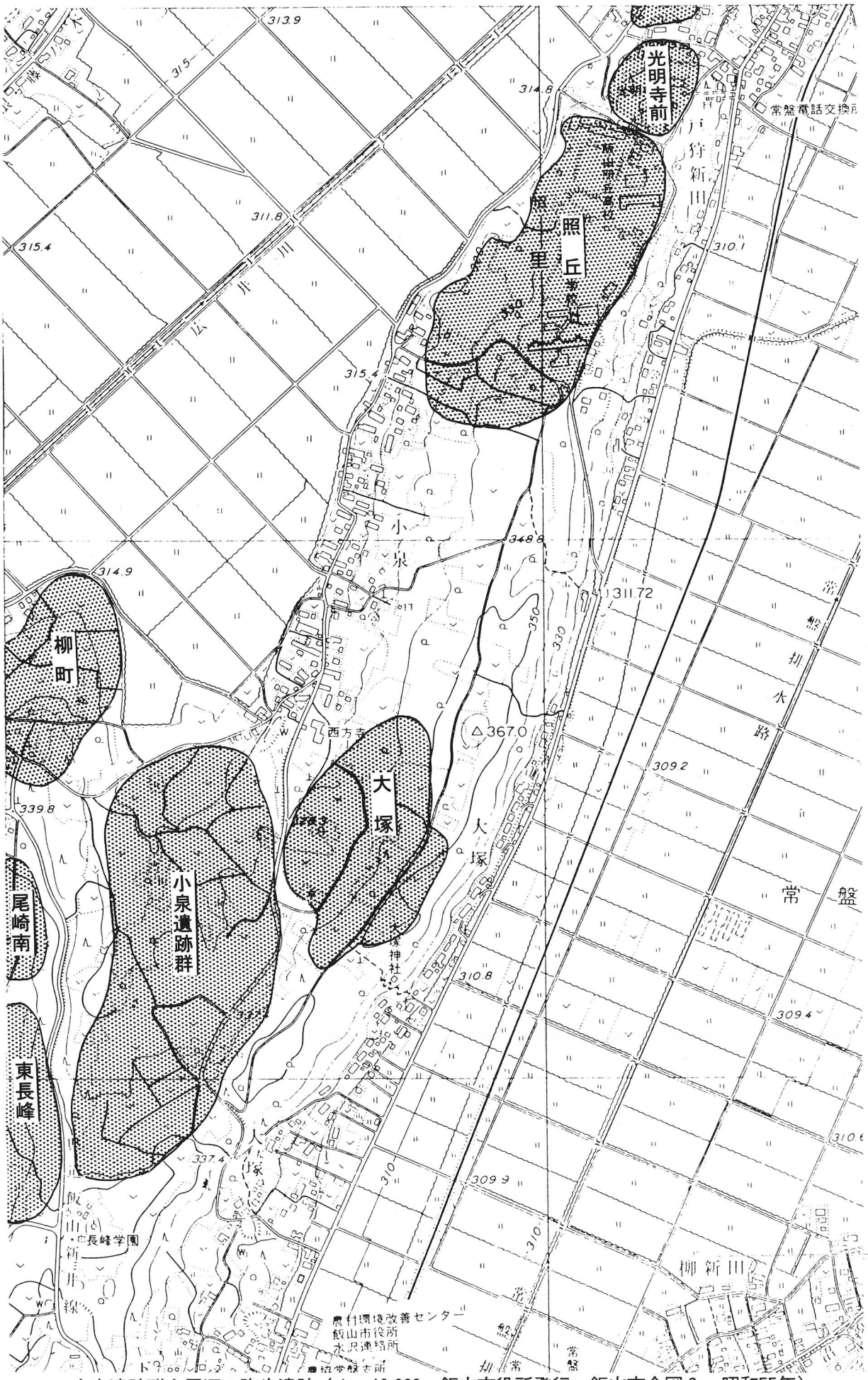
その後、平成２年２月になり新たに北側に拡張する計画が浮上した（二次分）。このため、前回の未調査地区と二次造成地の箇所約六万平米が新たに調査対象となった。このうち遺跡の範囲にかかり、さらに削土によって消滅が予想される部分は、平成２年度で約二万五千平米、三年度が約一万平米であった。

このように調査は幾度か変更・増加することとなった。今回報告する概要は、平成２年度分の調査概要であるが、昭和63年度調査区の続きであり、さらに平成３年度もその続きを行っている。正式な・整理作業・報告は平成４・５年度で実施する予定である。

小泉遺跡群遠景（鷹落山・ハンググライダーリリース台より）



小泉遺跡群の位置（国土地理院発行　飯山　昭和56年）



小泉遺跡群と周辺の弥生遺跡（１：10,000　飯山市役所発行　飯山市全図３　昭和55年）

B　小泉遺跡群の概要

飯山盆地のほぼ中央を南北に延びる丘陵が長峰丘陵であるるこの丘陵上には弥生時代の遺跡として尾崎・東長峰・照里・下林などの遺跡が知られている。古くは北沢量平・栗岩英治両氏らによって弥生式土器・石器が長峰丘陵の尾崎や法寺から採集されていた。藤森栄一氏はこのうちの石器を『千曲川下流長峰、高丘の弥生式石器』と題して報告している（藤森　1937）。戦後、飯山北高等学校郷土研究会により次々に発掘調査が実施され、弥生期の住居址も多く発見された（森山　1950、清水1950、森山1951、東・清水・森山・寺崎　1951、飯沢　1954）。こうした一連の報告により長峰丘陵上の弥生遺跡が注目されるようになり、宮坂栄弐氏（宮坂　1954）や桐原健氏（桐原　1955）によってその重要性が指摘された。昭和三十年代にはいって、桐原健氏や高橋桂氏によって精力的に調査や踏査が行われた。その成果は、柳町遺跡の発掘調査（桐原　1957　1959）、照丘遺跡（高橋　1962　1968）などの調査報告で示されている。

小泉遺跡が最初に注目されたのは、高橋桂氏が高井22号において『中期弥生式住居址の一例』と題して小泉遺跡の円形住居を報告したことによる。この地点は、今回の調査地点とはかなりの距離をもっているが、小泉の低地を望む長峰丘陵の分岐点に立地することは同様であるので、この地点を含めて小泉遺跡群と呼称することとした。

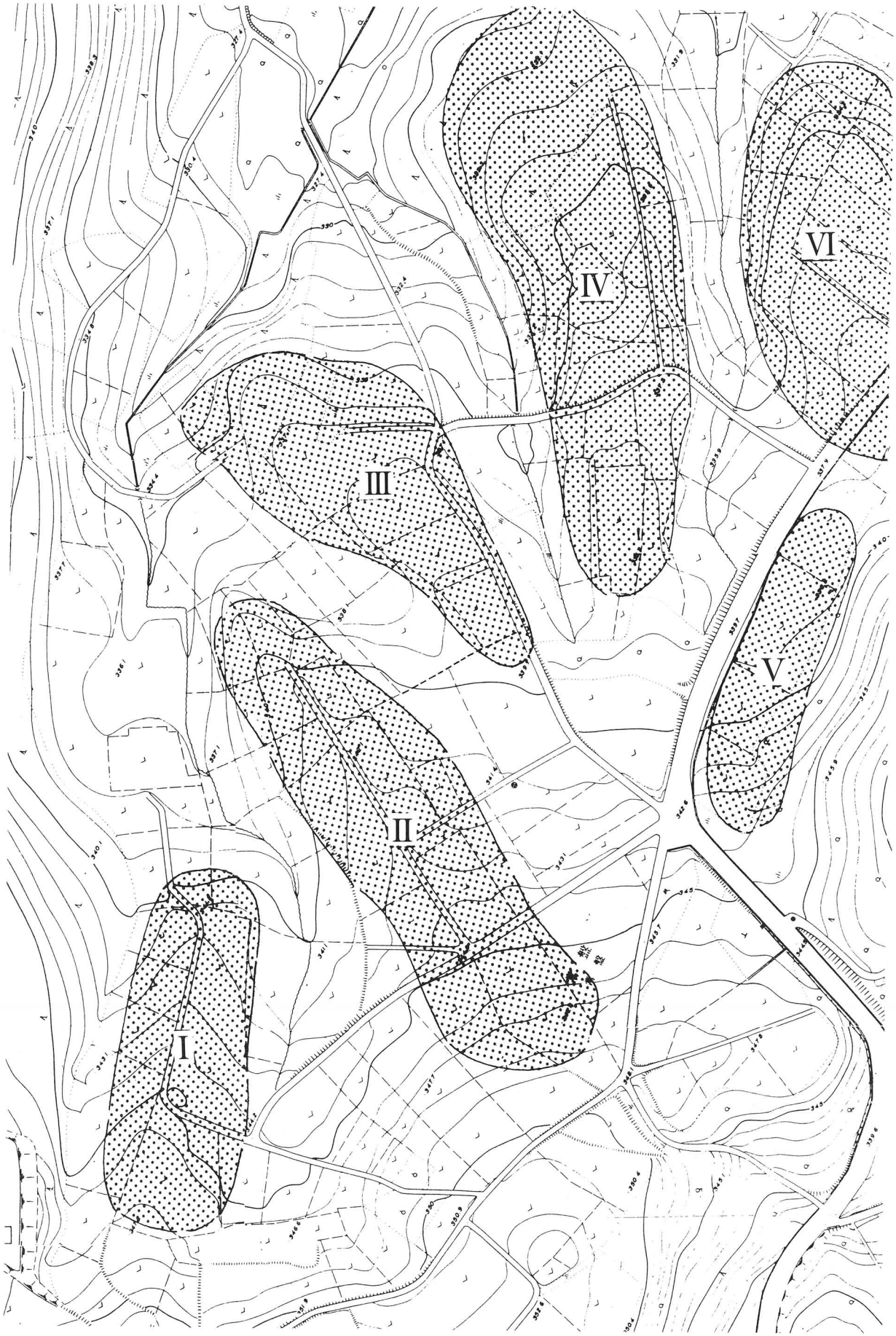
小泉遺跡群は、長峰丘陵が尾崎で終る支脈と照里へ続く支脈の分岐点にあたり、外様平の低湿地帯が入り組んでいる地点に立地する。仔細に見れば尾崎側支脈の裾野を流れる小河川とそこへ流れ込む照里側からの小河川に開析された丘陵状の台地が幾つか観察される。対象地区内には6か所の微高地があり、南から長峰越西丘陵・長峰越東丘陵・南原西丘陵・南原東丘陵・南原丘陵・南原丘陵と仮称していた。そして、これらの丘陵のすべてにわたって弥生時代中・後期の遺跡が存在している。

昭和63年の調査では、各丘陵別に字名と方位を考慮して名称を与えていたが、第二次造成地区も加わったために煩雑となってしまった。そのため今回の概要報告を行うにあたって、以下のとおりに改称することとした。

（旧名称）	（新規遺跡名）	（調査実施年度）	（開発区分）
長峰越西	小泉遺跡群Ⅰ遺跡	昭和63年度実施	一次造成分
長峰越東	小泉遺跡群Ⅱ遺跡	昭和63年・平成2年実施	一次造成分
南原西	小泉遺跡群Ⅲ遺跡	昭和63年・平成2年実施	一・二次造成分
南原東	小泉遺跡群Ⅳ遺跡	昭和63年・平成2年実施	一・二次造成分
南原	小泉遺跡群Ⅵ遺跡	平成2年実施	二次造成分
（道路区）	小泉遺跡群Ⅴ遺跡	平成2年実施	道路改良

引用・参考文献

藤森栄一　1937　「千曲川下流長峰、高丘の弥生石器」　『考古学』8－8
森山茂夫　1950　「外様村尾崎東長峰発掘調査報告（一）」　『下水内郡遺跡発掘調査報告書』
清水　亨　1950　「外様村尾崎東長峰発掘調査報告（二）」　『下水内郡遺跡発掘調査報告書』
森山茂夫　1951　「外様村尾崎東長峰遺跡第7号住居址」　『水内会会報』3
東道雄・清水亨・森山茂夫・寺崎昭夫「下水内郡外様村東長峰遺跡3・4・5・6・7号住居址」『下水内郡遺跡発掘調査報告2』
宮坂英弐　1955　「長野県下水内郡長峰遺跡」　『日本考古学年報』3
桐原　健　1955　「長峰尾崎遺跡の重要性」　『若木考古』38・39合
桐原　健　1957　「北信濃長峰丘陵柳町遺跡発掘調査概報」　『信濃』9－1
桐原　健　1959　「北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡」　『考古学雑誌』45－1
高橋　桂　1962　「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」『信濃』14－11
高橋　桂　1968　「長野県飯山市照里環状周溝遺跡略報」　『信濃』20－4
高橋　桂　1972　「中期弥生式住居の一例」　『高井』22



小泉遺跡群遺跡区分（1：2,000）

主要遺構
掘立柱建物址
中期竪穴式住居址
後期竪穴式住居址
土坑墓(木棺墓)群
昭和63年調査
I
II
III
IV
V
VI

小泉遺跡群遺構分布図

C　昭和63年の調査概要

昭和63年度の調査については、既に『小泉遺跡群調査概要　飯山市教委　1989』で報告しているところであるが、今回の調査区と接続することから簡単に概要を触れる。

遺跡は、遺跡群の南端を占めており、63年度の調査で全て終了した。弥生中期を主体とする遺跡である。遺跡は長い丘陵上にあり、後期を主体とした竪穴住居址が検出されている。後期住居址ＳＩ01の炉から発見された流水文と雷文のある炭化木製品が注目されている。Ⅲ区は第１次造成区の北端で、東側が畑作の関係で調査未了となっていた箇所である。後期住居址が７軒検出され、遺物も多く出土している。Ⅳ区は第１次造成区北東端の丘陵で、中期住居址と掘立柱建物址が検出されている。詳細は以下のとおりである。

遺跡名（旧名称）	時 代（面積）	主　な　遺　構	主な出土遺物
Ⅰ （長峰越西）	旧石器・弥生中期	旧石器土坑・弥生中期竪穴住居３、掘立柱建物16、土壙墓１	ナイフ形石器・彫器・抉入石器 弥生中期土器・石器
Ⅱ （長峰越東）	弥生中期・後期	弥生中期竪穴住居２、後期竪穴住居10、掘立柱建物９	弥生中期・後期土器 管玉、石包丁、文様の有る木製品石器
Ⅲ （南原西）	弥生中期・後期	弥生中期竪穴住居１、後期竪穴住居７、掘立柱建物３	弥生中期・後期土器 石鏃・槍ほか石器
Ⅳ （南原東）	弥生中期	弥生中期竪穴住居２、掘立柱建物10	弥生中期土器・石器

昭和63年（第一次）調査風景

2　調査

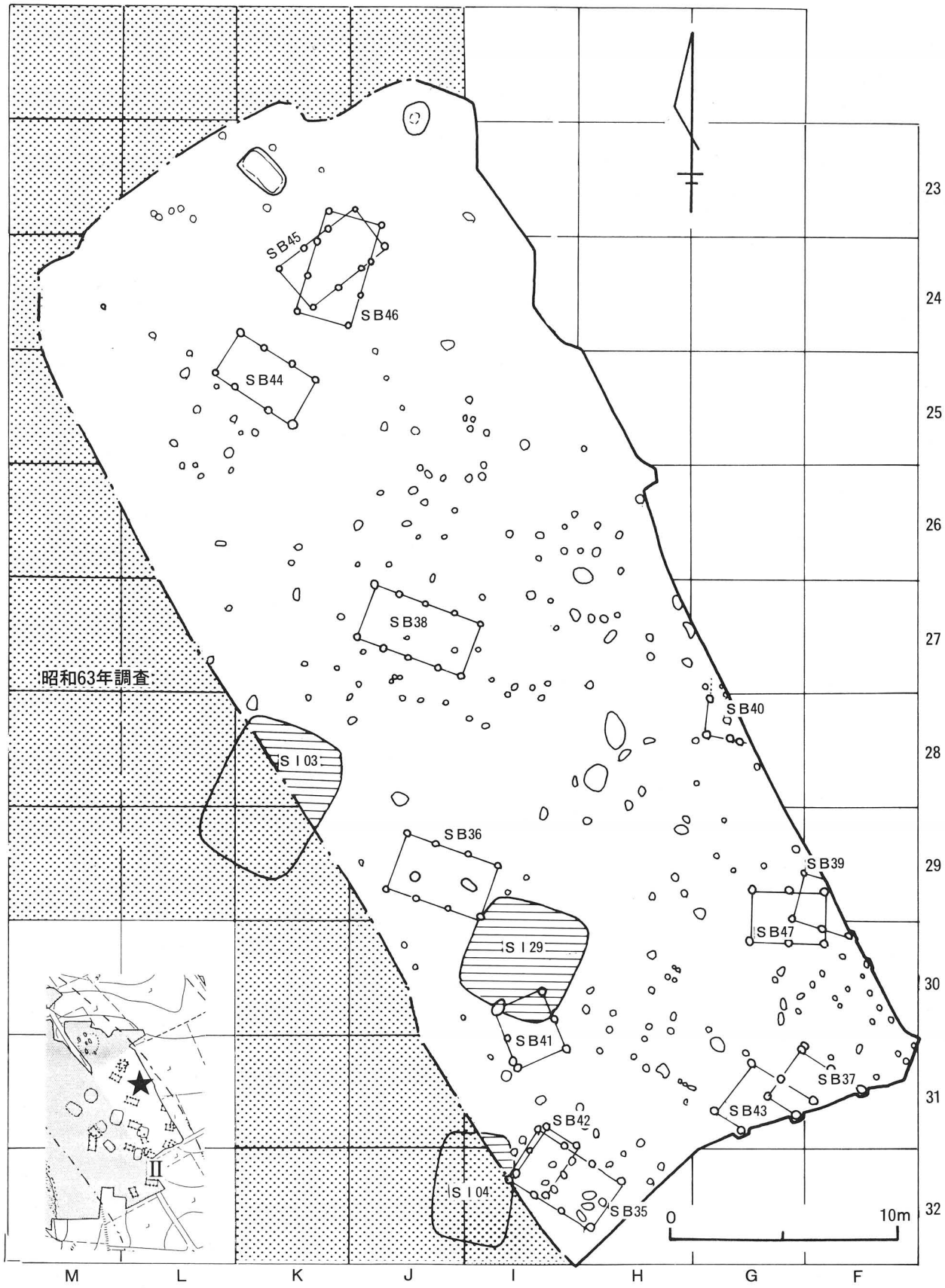
A　小泉遺跡群遺跡の調査

本遺跡群のなかで最も広い平坦面を有する丘陵上に所在する。昭和63年の調査では平坦面から南傾斜面にかけて調査を行った。今回の場所は前回の調査の北側に接する部分で、住居址群の密集する範囲と予測していた場所である。なお、前回の調査区と今回の調査区の間には農道が存在しており、この道路によって南側が大字常盤字長峰越、北側が大字照里字南原となり字界であった。

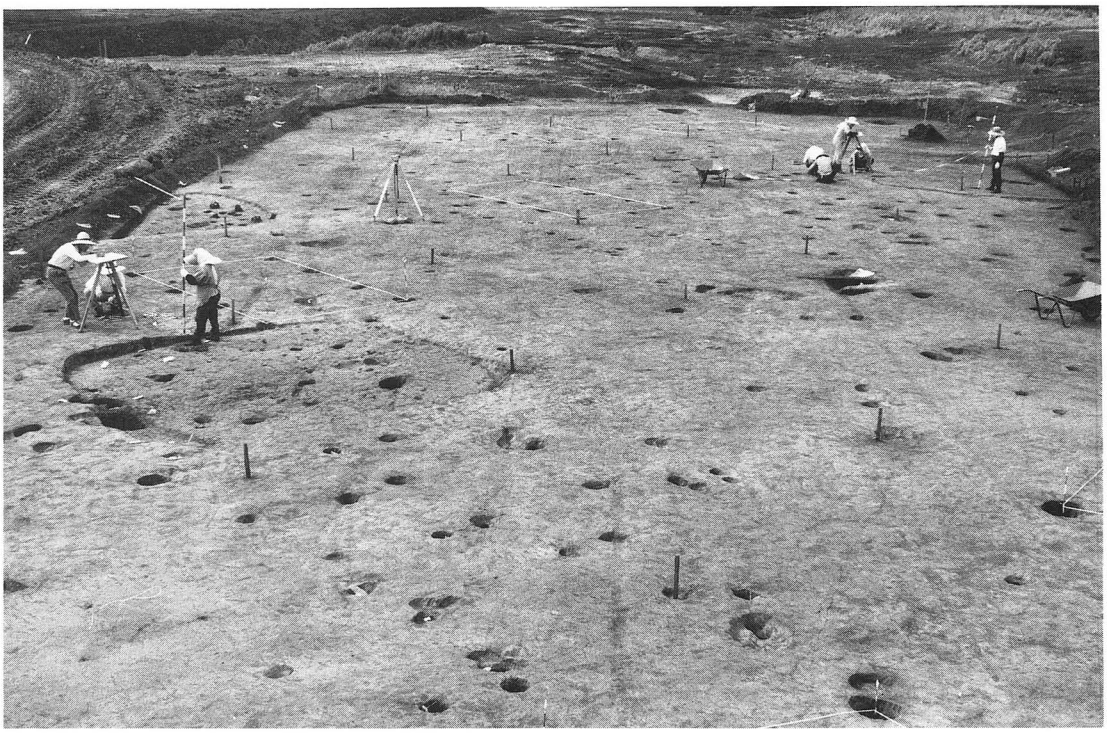
調査面積は約920㎡で、北および東にさらに拡張すべきであったが、作物との関係で断念せざるをえなかった。検出された遺構は、竪穴住居址３軒、掘立柱建物13軒で他に土壙が２基以上発見されている。このうちＳＩ03とＳＩ04はすでに昭和63年次に確認されている。ＳＩ29は弥生後期の竪穴住居址で、主柱穴・貼り床などしっかりとしていた。掘立柱建物址の多くについては時代判定する遺物に恵まれていないが、ＳＢ43ピットから中期小型壺・甕が出土しており、その状態からも中期と考えられる。また、ＳＢ36・41は後期住居址ＳＩ29を切っていることからことから後期のＳＩ29以降に建てられたものである。

昭和63年調査区域をあわせると、遺跡は弥生中期竪穴住居址２軒、後期住居址10軒となる。掘立柱建物址は22棟である。

Ⅱ遺跡発掘調査風景（東より・左側は第一次調査区　造成中）

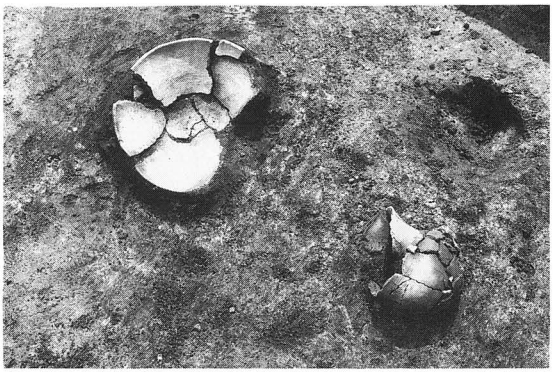


III遺跡遺構分布図（1：250）

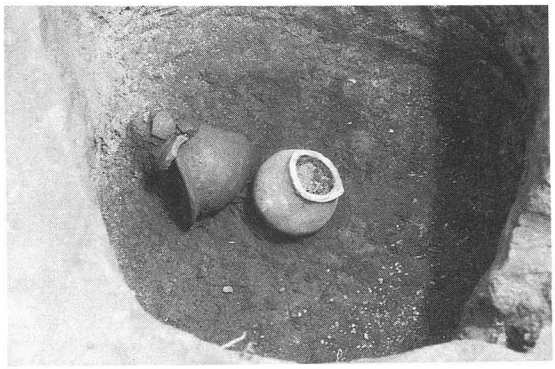


II遺跡発掘調査風景（東より）

ＳＩ29



ＳＩ29より出土した土器



ＳＢ43内土器出土状態

ＳＢ43出土

C　小泉遺跡群Ⅲ遺跡

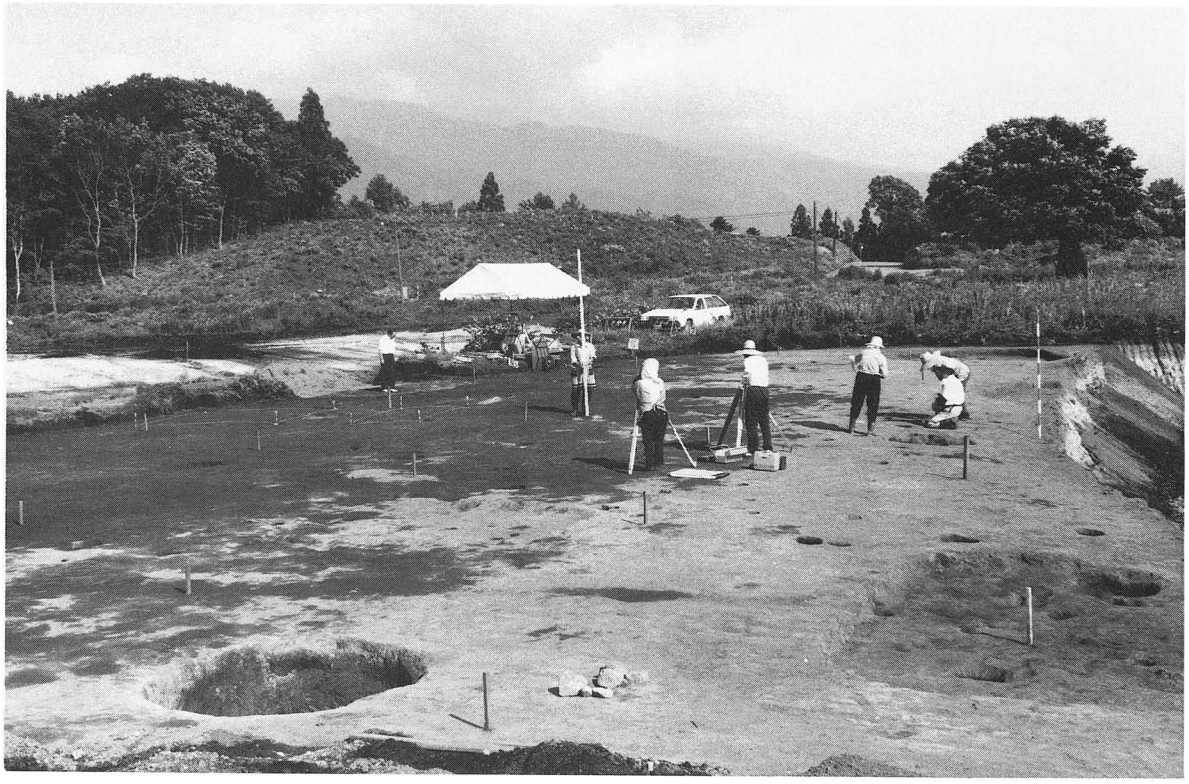
旧南原西丘陵と呼称した地区で、舌状台地的な地形を呈している。昭和63年には最も平坦な場所を調査して、弥生中期住居址１軒、同後期の住居址７軒を検出した。今回の調査区はそれに接した東側部分で、約700㎡を調査した。発見された主な遺構は竪穴住居址６軒（中期２・後期４）、掘立柱建物址２乃至３軒、井戸址１基であった。中期の住居址は今までと同様に円形プランを基本としている。後期は方形乃至長方形、及び隅丸長方形プランである。本丘陵で後期住居址は、次に述べるａ区で検出された１軒を加えると12軒となる。時期的にはさらに二〜三期に編年できそうなので、一時期４〜５軒程度と思われる。井戸址については、素掘りで覆土中間まで弥生中・後期の土器が出土しているが、時期についての判定は今後の検討に委ねたい。

なお、ＳＩ34の弥生中期住居址覆土より、石鏃・紡錘車・碧玉石核等が出土している。

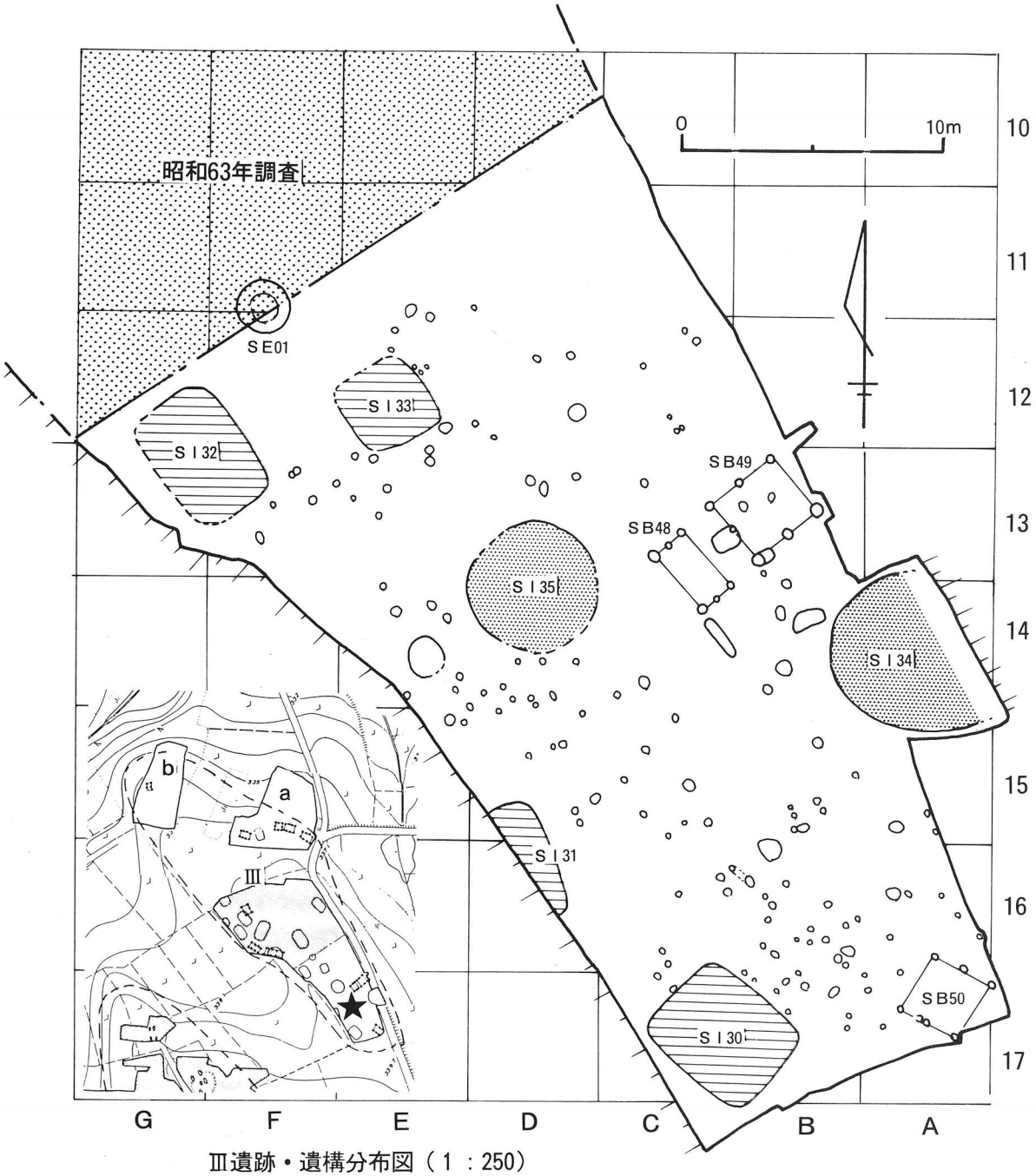
ａ・ｂ区

二次造成にかかる部分で、遺跡の台地末端である。ａ区では竪穴住居１軒、掘立柱建物址４軒が検出されている。住居址は後期であるが、掘立柱建物址ＳＢ55では中期無頸壺が完形で出土している（写真）。ｂ区では掘立柱建物址と推定される柱穴群１か所が確認されたのみで、本遺跡の範囲限界をほぼ把握できたと思われる。

昭和63年次の調査区域を含めると弥生中期竪穴住居址３軒、後期住居址11軒、掘立柱建物址11棟、井戸址１基ほかとなる。



Ⅲ遺跡測量作業風景



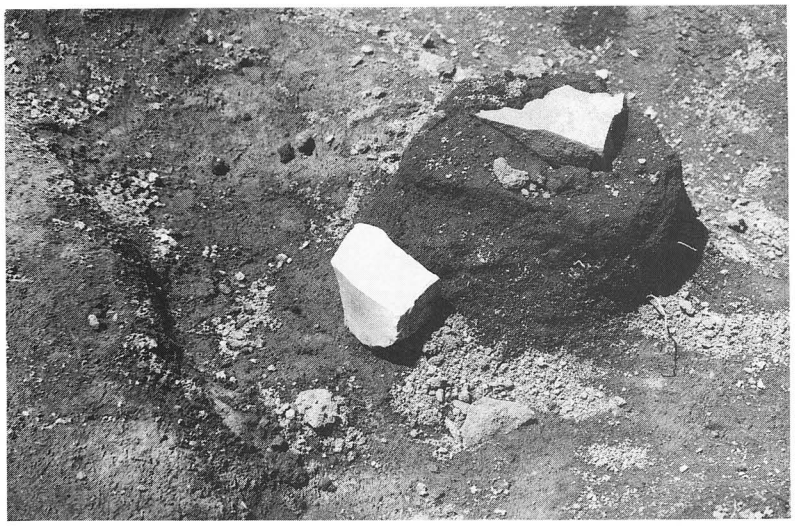
Ⅲ遺跡・遺構分布図（1：250）

SI30　遺物出土状態（東にまとまる）

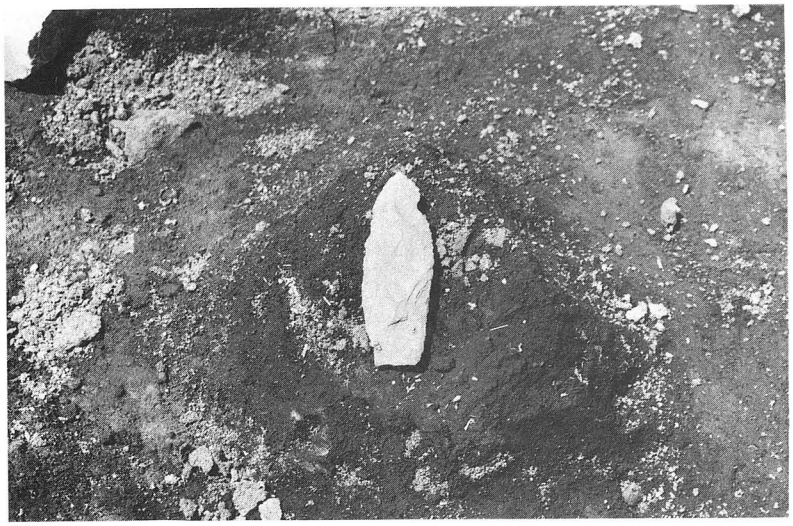
SI30　遺物出土状態

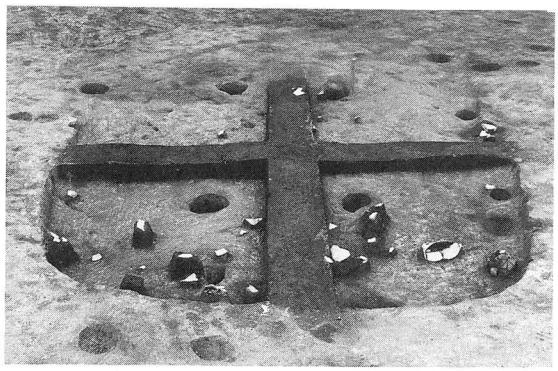
ＳＩ34全景（弥生中期）
（十字に帯を残しての調査）
ほぼ円形であるが、一部崖によって破壊されている。

ＳＩ34 碧玉出土状態
原産地は不明



ＳＩ34 石槍出土状態
弥生の石槍は珍しい。

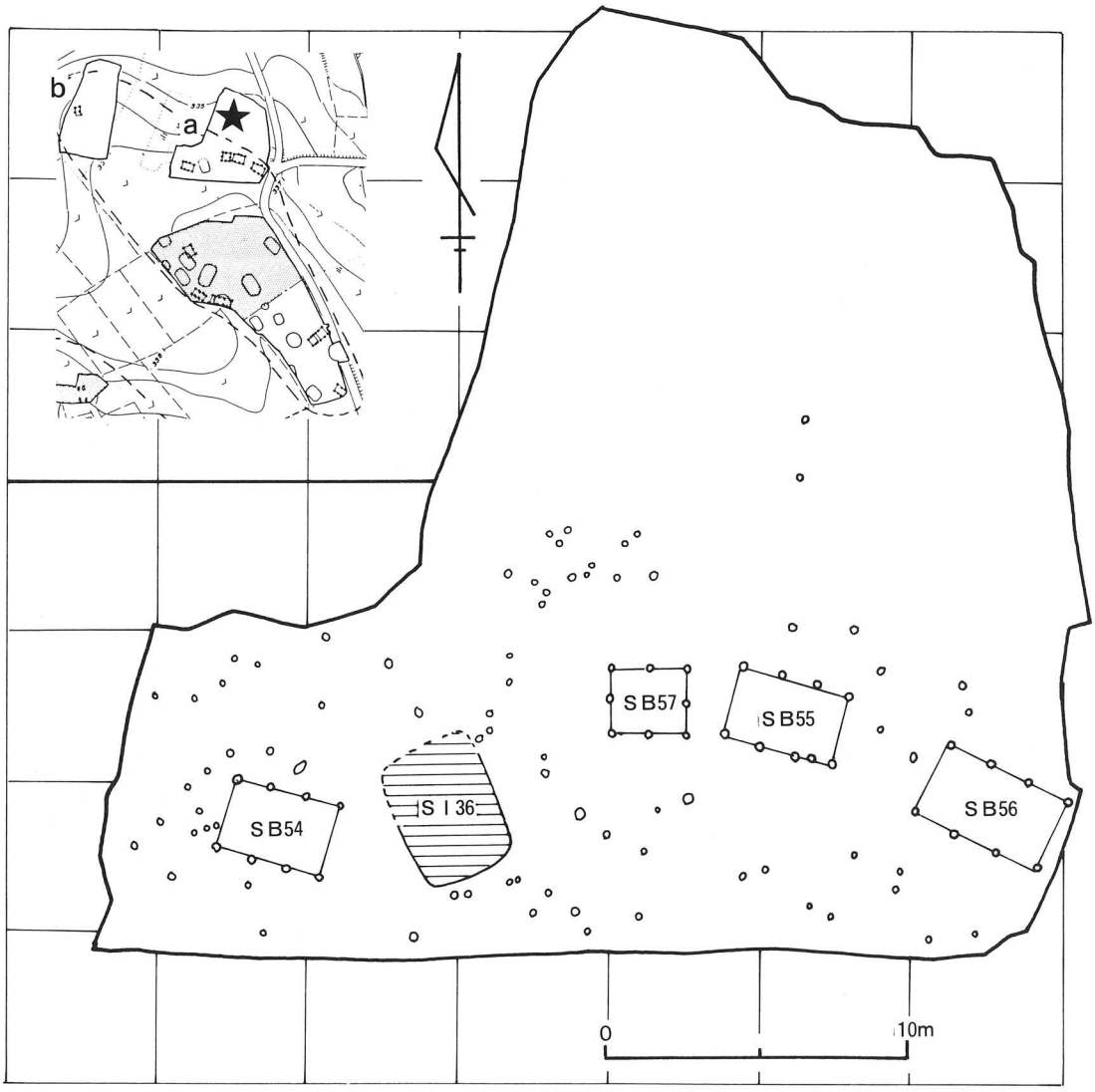




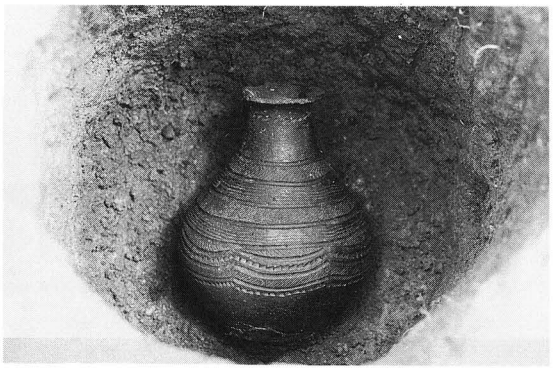
ＳＩ36 全景（弥生後期）

隅丸長方形で、一部の壁は耕作で破壊されていた。

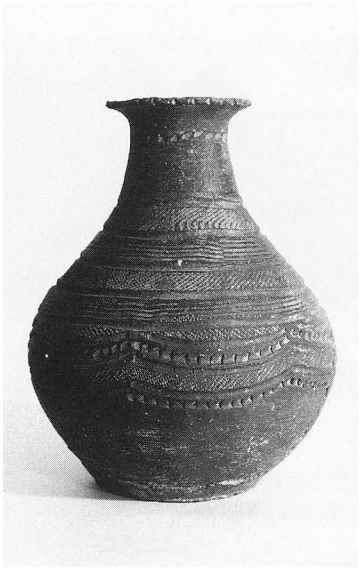
ＳＩ36 出土品



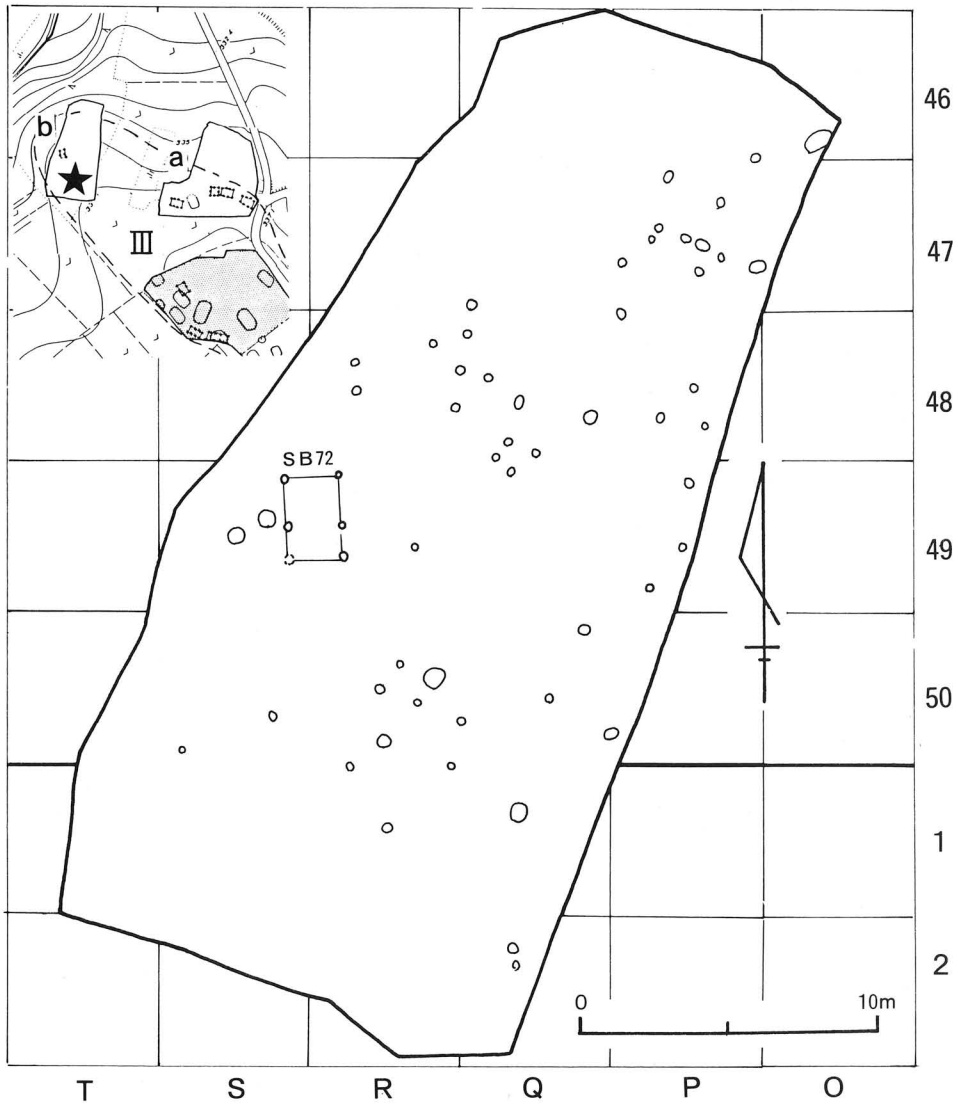
Ⅲ遺跡ａ区遺構分布図（１：250）



ＳＢ55 ピット内土器出土状態



ＳＢ55 出土壺形土器



Ⅲ遺跡ｂ区遺構分布図

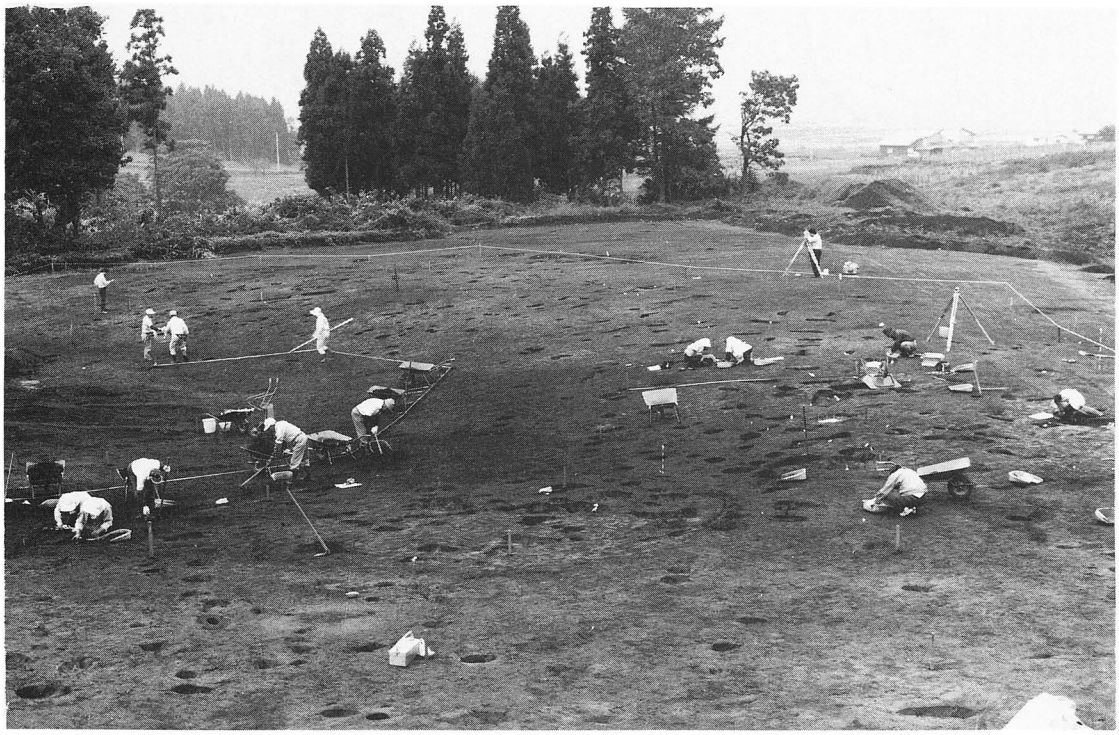
D　小泉遺跡群遺跡

平坦地が少ないものの馬の背状台地が長く続いている。昭和63年の調査地区は台地の奥で、第一次造成分の北端であったが、二次造成分で台地の中央から末端面までの大半が削平されることとなった。

検出された遺構は、竪穴住居６軒（弥生中期２・後期４）、掘立柱建物址20棟、土壙墓（木棺墓）約90基、溝状土壙６基ほかである。

ここで注目されるのは90基確認された木棺墓である。大別して長軸が南北・東西の２方向があり、例外的なものも斜面に直行乃至平行している。配置は南側の谷開口部に対して弧状に、ほぼ等高線にそってまとまりを有している。一部に木棺墓同士の切り合いがあり、さらに掘立柱建物址に切られている木棺墓もある。したがって、若干の時期差が存在しているものと考えられる。構造的には、木口痕のみを有するものが大半を占め、若干のくぼみを有した木棺墓は10基、さらに掘りくぼめただけの土壙墓は５基存在している。これは、約20㎝の表土直下で露呈してしまうためで、表土の流出や耕作により壁が破壊されてしまったためと考えられる。しかし、確認面より壙底まで30㎝ある土壙墓も存在するところから、木棺墓は元来土壙自体が浅いものであったのかもしれない。規模は、木口痕間の距離が200㎝、幅75㎝の大型タイプと、同60㎝、幅40㎝の小型タイプとがある。出土遺物は、管玉や勾玉の装飾品のみで土器は木口痕に小破片で混在的に出土したのみであった。管玉・勾玉は、５基から出土している。そのうちの一基は土壙墓で、計34点の管玉が出土した。他の四基からは１点から36点出土し、さらにそのうちの一基からは勾玉一点が管玉とともに出土している。

竪穴住居址は、中期の円形プランと後期の長方形乃至方形プランの形態が認められる。中期住居址はＳＩ38・41・42の３軒で、37・39・40の３軒は後期の住居址である。掘立柱建物址は22棟を数える。昭和63年調査区域を含めると、中期住居址５軒、後期住居址３軒、掘立柱建物址32棟、土壙墓90基となる。



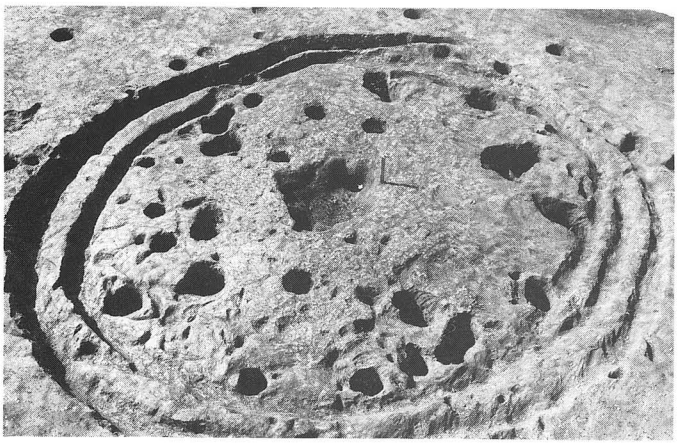
Ⅳ 遺跡発掘風景

IV 遺跡遺構分布図（1：500）

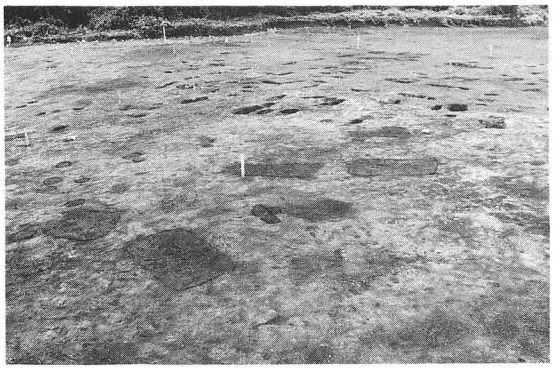
ＳＩ40（弥生後期）

ＳＩ41 発掘風景

ＳＩ41（弥生中期）



ＳＩ41内ピット出土土器

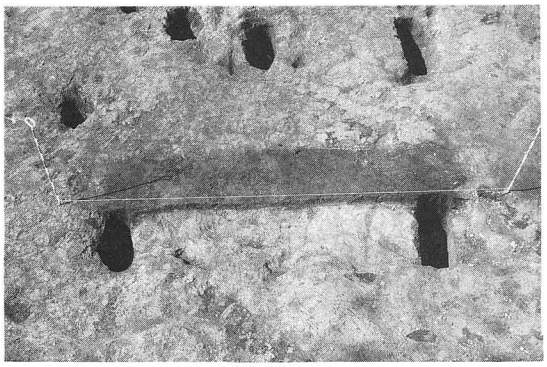


木棺墓群検出状態

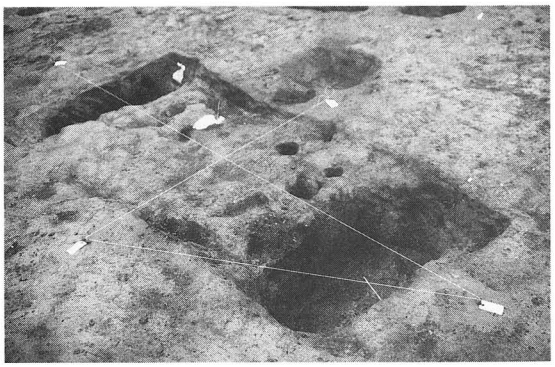
木口痕のみの検出状況

木棺墓群発掘風景

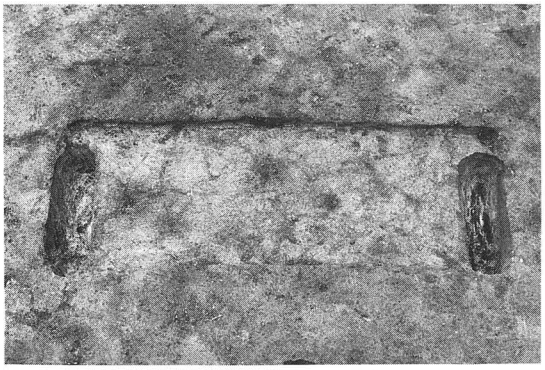
木棺墓群完掘状況



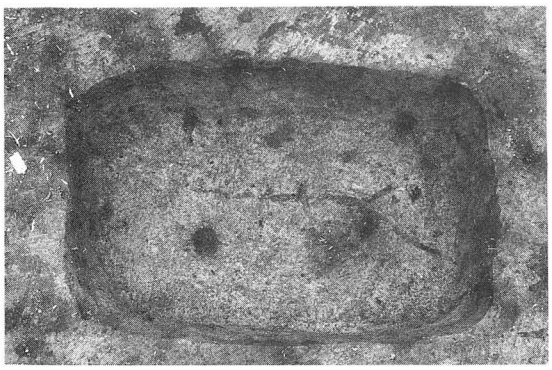
木棺墓（ＳＫＢ54）



木棺墓（ＳＫＢ69）

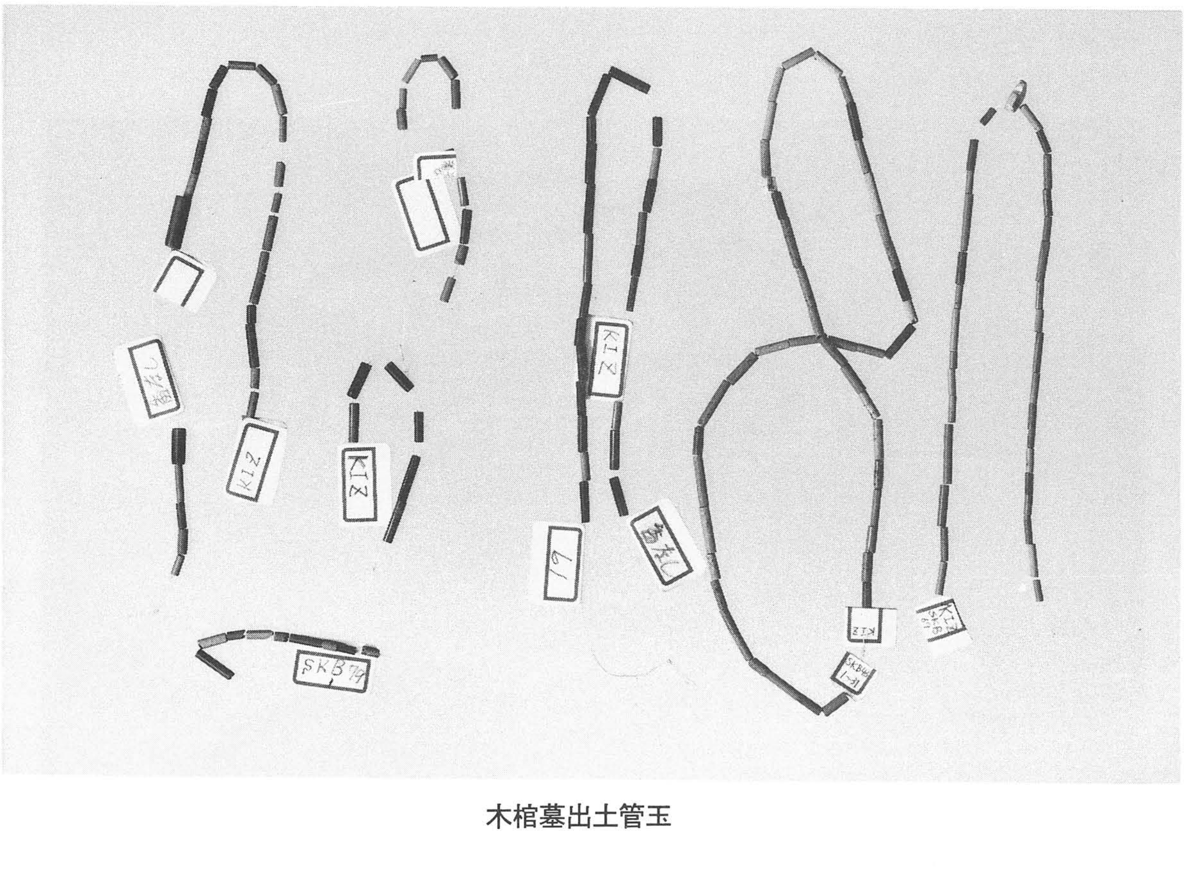


木棺墓（ＳＫＢ48）



土壙墓（ＳＫＢ43）

木棺墓（ＳＫＢ69）勾玉・管玉出土状態



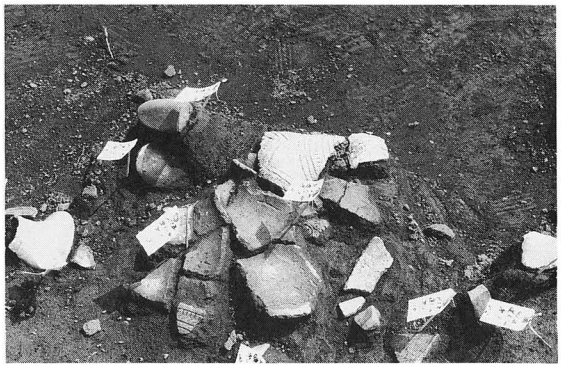
木棺墓出土管玉

E　小泉遺跡群遺跡

工業団地造成にかかる市道の付け替え工事に伴うもので、調査時には道路区と呼称していた。この地区は、道路幅のみの調査のために同一グリットを使用せずに道路センター杭を基準に設定した。

本遺跡の主体部となる箇所は発見できなかったが、全体的には東側の斜面直下に発達した谷頭部で、黒色土によって厚く覆われていた。遺物は表土から約50の黒色土中に包含されていたが、遺構等は確認困難で掘立柱建物趾址１棟を検出したにすぎない。また、遺物が集中して出土する地点が10箇所程で確認されている。すべて弥生中期に所属するもので、ミニチュア土器も含まれる。

集中地点出土ミニチュア土器出土状況



集中地点土器出土状況

Ｖ遺跡発掘風景

F　小泉遺跡群遺跡

第２次造成にかかる地区である。南原２と呼称していた地区である。比較的小規模な丘陵上にあり、約3100㎡を調査した。表土が約20〜30と浅く、その直下は漸移層がなく黄褐色テフラ層となる。遺構はこの面で検出したが、林檎植哉による坑や深耕機械による攪乱・削平があり、遺存状態は悪かった。

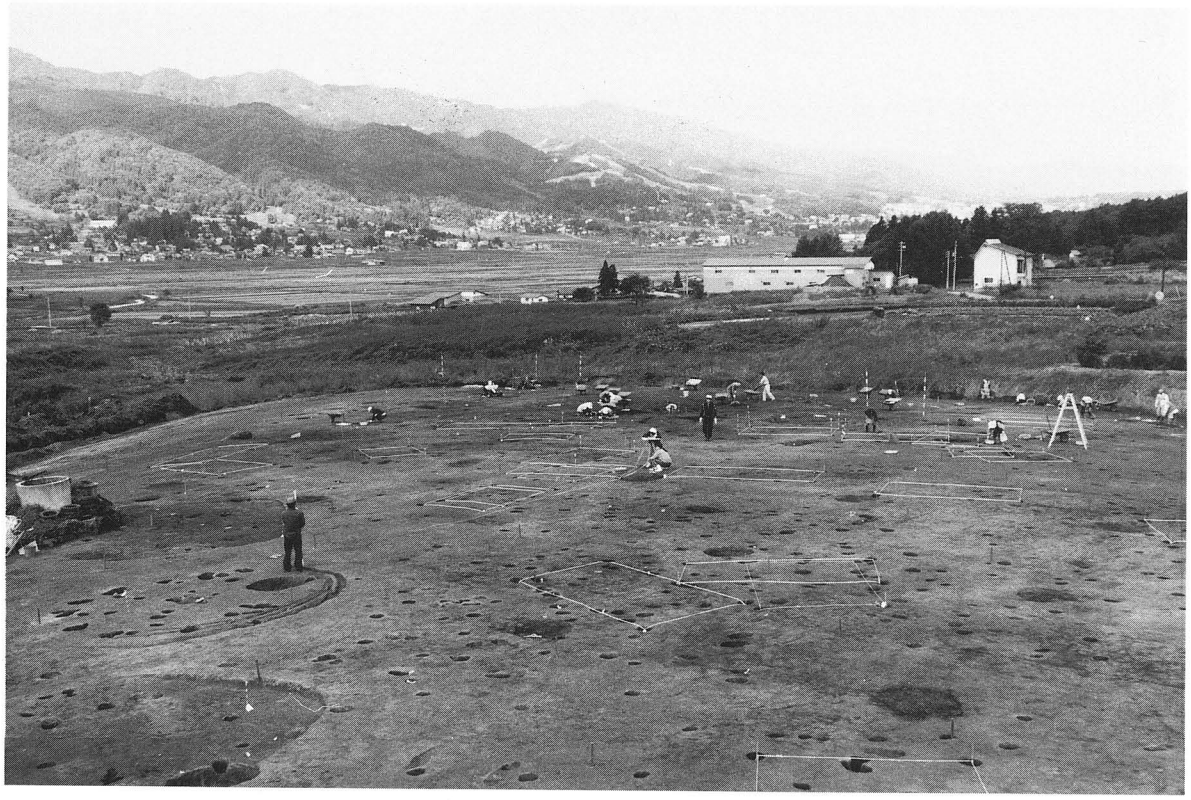
検出された遺構は、竪穴住居址12軒（中期８、後期４）、掘立柱建物址41棟、土壙６基ほかである。中期住居址はＳＩ48・52を除き周溝・ピットのみの検出で、床面も破壊されている例が多い。後期住居址は壁が残されている場合が多く、ＳＩ49では土器も多く出土した。掘立柱建物址は中・後期の時代識別は十分に行っていないが、竪穴住居址に比して異常に多いことが指摘される。

Ⅵ遺跡発掘風景（南より）

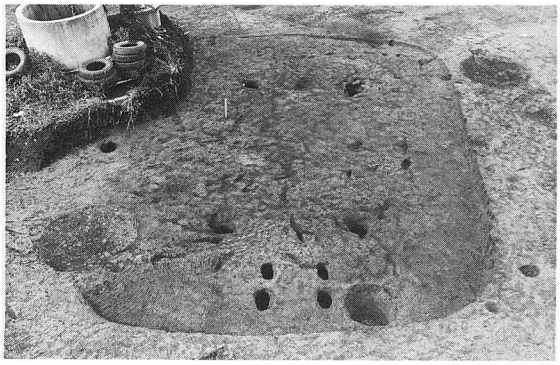
（奥に広がる低地は外様平北部、さらに関田山脈）

SB122
SB121
SI54
SI53
SI51
SI50
SB119
SB120
SB105
SI52
SB108
SB111
SI49
SI48
SB118
SB117
SB94
SI47
SB107
SB112
SB110
SB106
SB115
SB113
SB93
SB116
SB109
SB117
SB117
SI46
SB97A
SB97B
SB92
SB96
SB100
SB102
SB101
SI45
SB95
SB103
SB91
SB104
SI44
SB86
SB90
SI43
SB87
SB85
SB88
SB89
SB84
SB83
0
10m
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B

VI遺跡遺構分布図



Ｖ遺跡調査区全景（南より）

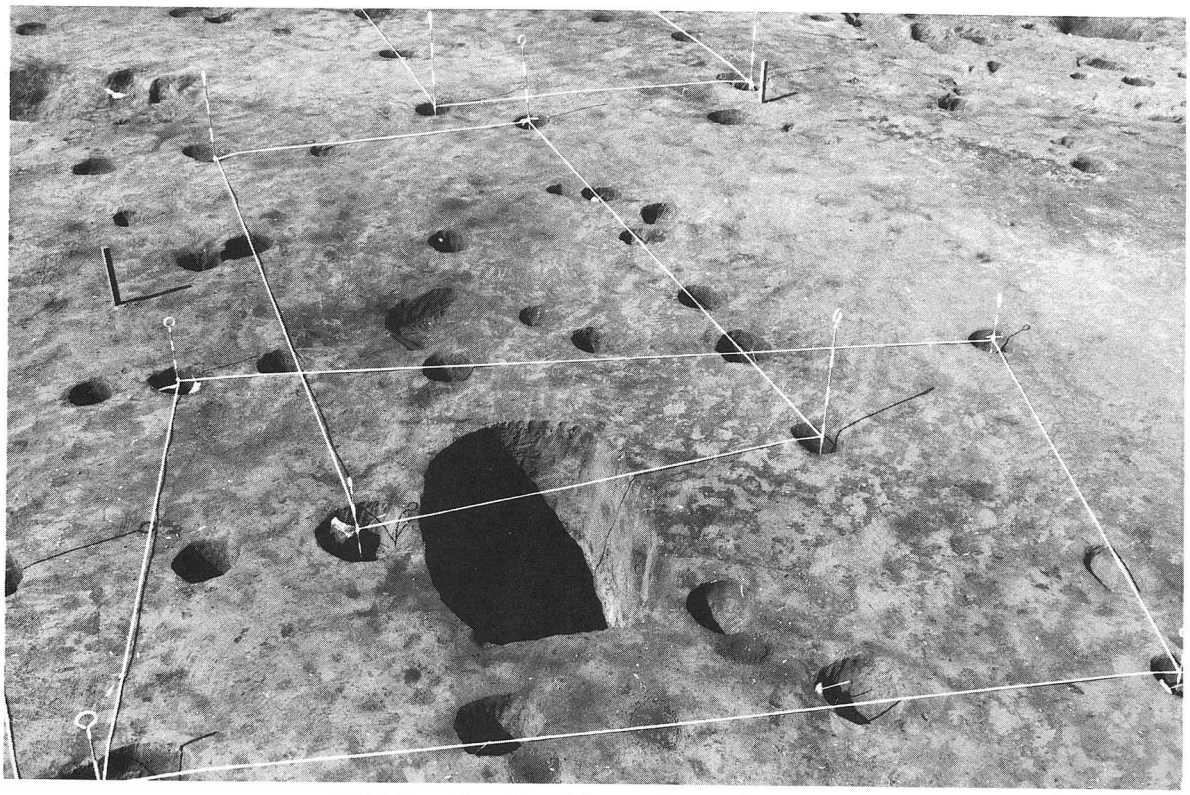


ＳＩ46（弥生後期）

ＳＩ46出土品

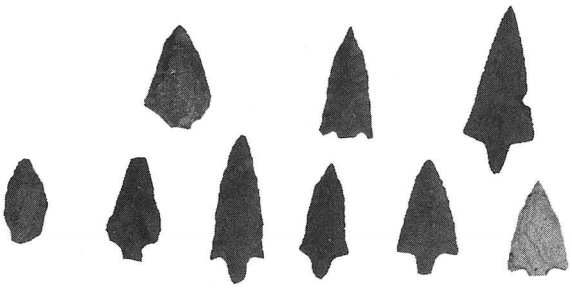
ＳＩ49遺物出土状態

ＳＩ49出土品



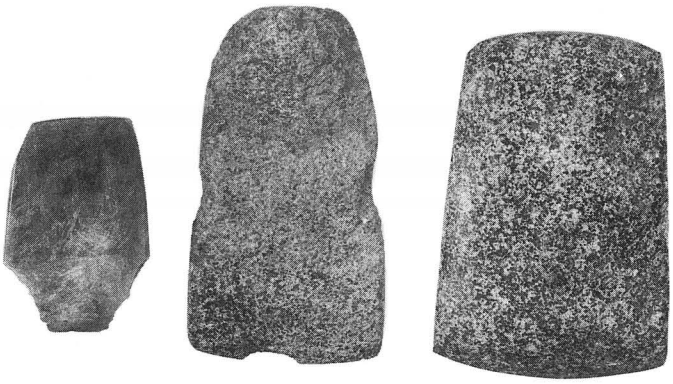
ＳＢ109・115・116（土坑はおとし穴か）

石の道具



石鏃

石槍



摩製石器

－各地区出土－

3　後記

長峰工業団地造成に伴う小泉遺跡群の発掘調査は、昭和63年から実施している。平成元年度は諸事情により調査を実施できなかったが、2年度はその影響も加わって膨大な面積を調査することとなった。2年度は、他に国営農地開発に伴う新堤・トトノ池南遺跡の発掘調査等もあって、単年度の調査面積が3万平米を越え、一市がこなせる面積を大きく上回った。飯山市の発掘能力としては一万平米が限界であろうと考えられる。すなわち、それだけ発掘の精度が落ちるのは必定であろうし、何よりも調査員・作業員の負担が大きすぎる。今回の調査では、調査員として小林・丸山・常田の三氏を新たに調査員に委嘱し、国営農地開発関係遺跡を常盤井・田村両調査員があたることとして、二班体制を組んだ。しかし、この二遺跡の調査のあいだにも他の調査が入り三ヵ所になる時期もあったため、おそらく腰を落ち着けた調査期間はそうなかったと思われる。今回の発掘成果が調査員・作業員の献身的努力のうえに成り立っていることを忘れてはならないだろう。平成2年度は大小6遺跡、10か所の発掘調査を実施した。この小泉遺跡群調査概要の発刊ですべての報告が完了することになる。

平成2年度の小泉遺跡群の発掘は、昭和63年度の発掘区域の一部を含め5地区を調査した。いずれの地区でも弥生時代中・後期の集落址を検出することができた。特筆すべきことは、Ⅳ遺跡で検出された弥生時代中期の９０基余りの集団墓地である。人骨は残っていなかったが、耕作土直下でありながら勾玉・管玉などの装飾品が5基より検出されている。木口痕などからその多くは木棺墓であると推定されるが、これだけまとまった事例は東日本においては稀有であろう。もっとも、今回のように小丘陵全体を調査したことからその全貌が明らかになったもので、元来、本例のように集団墓地を形成するのが一般的であるのかもしれない。ただし、他の丘陵ではそうした集団墓地の形跡が認められないことは、小泉遺跡群全体の墓地であると考えられる。このことは、各丘陵に点在する小集落は社会的基盤を共有した『ムラ』の家族的単位であったとも推定されよう。かかる推論は今後の整理作業を通して明らかにされるべきと考えるが、弥生時代の集落研究において小泉遺跡群の果たす役割は大きいと思われる。そのほか住居址などの遺構や土器などの遺物についても多くの新知見があるが、本報告書のなかで明らかにしていきたい。

最後に発掘作業に従事してくださった多くの参加者に厚く御礼申し上げたい。

平成２年度飯山市遺跡調査会（平成３年３月）

顧　　問	小山　邦武	市長
会　　長	佐藤　春夫	市教育委員長
副 会 長	長谷川元一	市社会教育委員長
委　　員	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長
	丸山　豊雄	市議会総務文教委員長
	中村　　敏	市公民館長
	高橋　　桂	日本考古学協会会員
	山崎美都技	市教育委員会委員長職務代理
	岩﨑　　彌	市教育委員会教育長
事務局長	佐藤　　清	市教育委員会教育次長
事務局次長	渡辺　　博	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月　静雄	市教育委員会社会教育係
	樋山二二子	市教育委員会臨時職員

調査団

団　　長	高橋　　桂	飯山北高等学校教諭
担 当 者	望月　静雄	社会教育係
調 査 員	小林　新治	（飯山）
	常田　利夫	（飯山）
	丸山　三二	（飯山）
	常盤井智行	（常盤）
	田村　況城	（外様）

参加者（順不同・敬称略）

高橋右内・達家わかの・村松修司・芳川昭治・高橋コシノ・市村ますみ・常田レエ子・清水三名・猪瀬光治・桜井伊都子・小林則義（以上飯山）・服部こう・服部正子・南久保まつ・西堀はつみ（以上尾崎）吉越信一郎・吉越まさの（以上大塚）・竹内大五郎・北条辰男・小林経雄・大森信衛（以上戸狩）・清水隼人（柳新田）・富岡みえ子・万場キヨノ（以上上野）・米持元志・米持なつえ・樋口幸正・江口武雄・江口正二・斉藤小雪・村山亨・高橋ちよえ・村山くま・樋口栄（以上温井）・鷲野吉太郎（関沢）

協力者

㈲写真測図・㈲大島重機

飯山市埋蔵文化財調査報告　第31集

小泉遺跡群調査概要Ⅱ

平成４年２月

編集・発行　長野県飯山市教育委員会

長野県飯山市大字飯山1,110-1

印　　刷　足立印刷所